

満月を眺めて

主任司祭 昌川信雄

満月を眺めながら筆を執りました。かつて教会は「復活」の日取りを春分の次の満月後の日曜日と決めましたね。私は満月を眺めるたびに主の復活を思ってきましたが、76年の人生でこれほど寂しい復活祭はありませんでした。しかし、この事態を許されたのは主なのです。主が許されない事は何一つ起こり得ないのですから。主はご自身を祝ってもらう以上に緊急重大な懸案を私たちに秘めておられるのでしょうか？

考えるに、人類は情報の大津波に乗っかり戯れて、天をつくまでに豊かさ便利さを貪って、心は地に残したまま神に仕えようと疑っていないかに見える世界です。集いから人々を隔離し、経済を凍らせ、引きこもりを余儀なくされたこの時、信徒の皆様はどのように過ごしておいででしょう。無力な私、新司祭は、皆様へのご挨拶の言葉も持ち合わせがないのです。

幸い私たちのパパ、教皇様は私たちを案じて善き羊飼いととして、青草を与えるべく数々の発信をなさっておられます。中でも5月は、神の民がとりわけ熱心に乙女マリアへの愛と崇敬を表す月として、家庭で家族一緒にロザリオの祈りを唱える素晴らしさを再発見するよう勧められています。

私たちが聖母とイエスの近くにいたなら恐れるものは何もありません。悪からも善を引き出すことがおできになる神が、私たちにこれほど大きな犠牲を過ごすことを許しておられるこの現実を、かつてのエジプトから解放された民の荒れ野における想定外の試練が真の神と出会うためだったと捉えて恐ぶ事は、神の目にとって地上の富を積み上げることよりももっと価値のある尊い、ミサに代る「神への供え物」になるでしょう。今週はこの辺で。

2020年5月8日



新緑の香里教会と新司祭